九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アンティ・ベラム南部奴隷制度の功罪をめぐる論争：レヴィジョニスト登場以後の展望

服部，哲郎

https://doi.org/10.15017/2244121

出版情報：史淵. 100, pp.219-232, 1968-03-01. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

アンティ・ベラム南部奴隷制度の功罪をめぐる論争

―レヴィジョニスト登場以後の展望―

服部哲郎

(一) まえがき
(二) レヴィジョニスト登場の背景
(三) 初期のレヴィジョニストたち
(四) T・P・ゴーヴァン以後
(五) むすび

(一)

アンティ・ベラム南部の奴隷制度をめぐる論争はすでに百年を越える歴史をもつ。しかもなお論争は依然として続けられ、見解の対立は一向に緩和された気配もない。そのことは今日アメリカで広く読まれているこの国の一般史や経済史のテキストにも反映し、それらにおけるアンティ・ベラム奴隷制度の評価は頗るまちまちである。[1] いうまでもなく、久しきにわたる論争がこの国の奴隷制研究に斉らした貢献は決して小さくはない。にも拘らず、論争じたいの調整にこれまで見るべき進歩がなかったのはなぜか。諸問題の解決のため従来試みられた方法以外に、もはや残された道はないのか。ともあれ、これまで論争に参加した最も有能な論争者たちの論著を通して、論争の展開過程に再検討を加えることは、争点の

解決へ向つて何等かの手がかりをうるために有効な方法の一つと考える。ここにあえて論争史の展望を試みる所以である。ただ本稿においては、紙面の制約もあり、展望の範囲を、いわゆるレヴィジョニストの登場以後に限定することを断っておきたい。

（二）

さて、論争の展望をレヴィジョニストたちの登場からはじめるとしても、そのレヴィジョニストたちの登場する背景の理解のために、それまでの論争史のごくあらましを大観しておくことは、やはり必要であろう。おもうに、アンティ・ベラム期の奴隷制論争においては、企業としての奴隷制度よりも、むしろ体制としての奴隷制度の問題がもっぱら中心的なテーマであったといってよい。このことはしかし別に驚くべきことではなかった。当時の奴隷制擁護論者としては、奴隷制度が奴隷主にとつて有利であるという論拠を盾に奴隷制擁護論をぶったのでは、徒らに南部の小農や貧農を刺戟するだけで却って逆効果が予想されたし、一方奴隷制廃止論者にとつても、奴隷制度によつて奴隷主たちが不当に儲けるという理由で彼等を告発しようとしても、儲けることの基本的権利が一般に是認されていたアメリカ社会では、殆んどその効果を期待しえないと考えられたからである。そこで当時としては体制としての奴隷制度が南部の、あるいはアメリカ全体の経済と福祉とにどのような影響をおよぼすかという問題が当然主要な争点とならざるをえなかったわけだ。ところでこうした問題を中心に双方の立場は、セクショナルな感情論をも交えて激しく対立したが、奴隷制度そのものの、経済的・社会的効用に関する双方の主張は必ずしも全面的に排他的ではなかったのである。。それは後に双方の主張の多くの部分がU・B・フィリップスにおいて一つの立場に包括されえた事実によつても例証されるであろう。

それではフィリップスはどのようにして双方の主張の統一に成功したか。それはいわば奴隷制度とプランテイション制度とを機能的に独立した別個のものとしてとらえる思考上の操作によってであった。すなわち彼によれば、プランテイショ

ン制度は労働力を組織し育成する役割を果したのに対し、奴隷制度はいわゆる「労働力の資本化」を通して労働力を固定化する手段として機能した。つまり彼はたとえばプランテイション制度が労働の規格化や手順の決定、労働力の指導・育成などの諸機能によってステイプル生産の向上に寄与したという意味で、奴隷制度擁護論者たちの主張した奴隷制度の利点を認めたが[2]、一方、奴隷制度が労働力を固定化したことによって、屢々奴隷たちから労働者として技術的に向上する機会を奪い去り[3]、また労働力の資本化を通して南部資本の固定化、さらには枯渇化を斉らすことによって南部経済の発展を抑止したという[4]意味で、こんどは奴隷制廃止論者たちの主張をも受け容れたのであった。なおフィリップスは、企業としての奴隷制度のプロフィタビリティの問題を彼以後の論争史の中にもち込んだという点でも注目されるが、ここではその所論の詳細に立入る余裕はない。ただ結論的に見て彼の企業としての奴隷制度に対する評価は、特に経営条件に恵まれたものを除いて、一般にそれは決して有利な商売ではなかったということにつきる[5]。そうなると奴隷制度は企業としては南部にとって全く不利な存在物であったということになる。それでは一体そのような不利な経済制度が数十年もの間南部社会に存在しえた理由は何か。彼によれば、奴隷制度はもともと労働力支配の手段として南部社会に導入されたものであったが、奴隷人口が次第に増大するにつれてそれははからずも人種支配のための手段として特別の役割をもつに至ったものである[6]。かくてフィリップスは奴隷制度の存続意義を経済制度としてよりもむしろ社会制度として高く評価していたことが注意され、「奴隷制度はビジネスであるよりもむしろ生活であった[7]」という彼の言葉は、そうした彼の立場を端的にいいあてているように思われる。

フィリップスの仕事は単に奴隷制論争史の上だけでなく、広く南部史研究の上に大きな足跡を残した。一九二〇年代から三〇年代にかけて南部の諸州では活潑な州史の研究が興ったが、それらはとりも直さず彼の影響下に行われたものであり、従つてまた奴隷制問題についてもフィリップスの見解を支持する立場を示した。こうした立場の代表的な研究者とし

てはミシシッピーのC・S・シドナー、アラバマのC・S・デーヴィス、ジョージアのR・B・フランダーズなどがあげられる。ただこれらの人々の研究では専ら地方史の研究に主眼がおかれていたせいもあって、そこで奴隷制度が問題にされる場合それは南部の経済全般にかかわりをもつ問題としてよりも、むしろ個人企業としてのプランテイションの経営にかかわる問題としてとり上げられたのは当然であった。しかしそのことが奴隷制論争史上にもつ意義の大きかったことは後説のとおりである。

さて、これら地方史の研究者の外にフィリップス的立場の継承者また推進者として注目される歴史家にJ・D・ヒルやC・W・ラムズデルがあった。ヒルは企業としての奴隷制度の分析をしたその論文の中で、プランターの中にはたしかに大きく儲けた連中もいたが、恐らくそういうケースは特に地の利をえていたとか、土壌に恵まれていたとか、個人的な管理能力に秀でていたなどのせいであって、総体的に見れば「奴隷制度のおかげで儲けたというより奴隷制度にも拘らず儲けることが出来たのだ」[8]、としているが、それは全くフィリップス的立場の祖述に外ならぬ。それにひきかえラムズデルは、奴隷制度が恵まれた条件の中でのみ採算がとれたというフィリップス的立場から出発しながら更に一歩をすすめて、一八五〇年代における南部経済の変動の中で奴隷制度が実質的に解体への道に追いこまれていったいきさつを分析している点が注目される[9]。

（三）

さて以上のように奴隷制度が個人企業としての面においても、経済制度としての面においても、南部社会にとって基本的に不利であったことを立証する為に、フィリップスとその追随者たちが各種のデータを基礎にその足場固めに懸命であつた間に、漸く新しい観点からの挑戦が企図されつつあった。いわゆるレヴィジョニストの登場がこれである。

レヴィジョニストたちは前記のようにまずフィリップス批判として現われるが、しかしそれは彼等の見解があらゆる点

でアンティ・フィリップス的であったということではない。むしろ初期のレヴィジョニストたちは、しばしばフィリップスを共通の出発点としてそこから発足し、ついでそれぞれの研究活動の過程の中で若干の争点についてフィリップスとは異った結論に到達した人たちであった。ミシシッピーのプランターであつた歴史家A・H・ストーンもいわばそういう初期レヴィジョニストの先頭に立つ一人であつた。彼は南部が北部に比べて著しくたちおくれていたとする見解をフィリップスから受け継いだが、そのたちおくれも奴隷制度のせいと見るべきか否かでフィリップスと袂を分つた。この決別の契機となつた一つの主要な争点は、奴隷制度と外国生れの移民との関係の問題であった。一体南部経済のおくれは、外国生れの移民が南部への移住を回避したことと無縁ではなく、しかもその回避は南部に奴隷制度が存在したことと関係がある、というのがこれまでフィリップスとその一派によって広く受け容れられてきた見解であった。[10] 之に対しストーンは、各種の統計資料に基きアメリカへ流入した外国生れの移民のうち、南部に定着した移民人口は、北部へのそれに比べてたしかに少なかったことは事実だけれども、アメリカにおける移民人口総数に対する南部移民の割合および南部の総人口に対する南部移民の割合についていえば、奴隷解放以前と以後とでは以後の方が却って少なくなっていることや、また南部における彼等移民人口の増加率について見ても、奴隷制度がなくなってからの方が著しく減少しているなどの事実を指摘し、[11] それによって移民と奴隷制度との間に必ずしも関連性のないことを主張、従って南部の後進性の責任は奴隷制度にあったというよりもむしろニグロの存在そのものにあったことを立証しようと試みたのであった。[12] なお彼は南部経済のおくれを斉らした要因としては、南部の風土条件を考慮することの必要性をも指摘しているが、このようなストーンの見解は、やがてR・R・ラッセルおよびL・C・グレイによって受け継がれ、さらに発展せしめられることとなるである。

そこでまずラッセルであるが、彼はストーンに比べると遙かに広い視野に立って奴隷制度と南部経済との関係の問題をとりあげた。そして南部経済の一般的進路に大きな影響をおよぼしたものは奴隷制度というよりも、むしろ南部の風土、

地理的位置、交通の未発達、住民の生活態度というような自然的社会的諸条件であったと主張する。[13] たとえばアンティ・ベラム南部の土地がひどく荒廃したのは、奴隷を使って行われたプランテイション企業のせいというよりも、むしろ南部に雨が多く、しかも激しく降りつけて起伏の多い丘陵地帯の肥沃な土壌を流失してしまったからであり、また南部[14]が外国生れの移民を吸収出来なかったのも、そこに奴隷がいたということより、むしろ当時大西洋航路の唯一の終着港が南部から遠いニュー・ヨークであったとか、南部には彼等を惹きつけるだけの充分な経済的機会が乏しかったなどの要因の方がはるかに大きいのだ。[15] 南部がいつも資本の不足に悩まされ、工業の発展に恵まれなかったということにしても、南部の資本が奴隷という形で固定化されたためというよりむしろ当時の南部ではステイプル生産に投資することが一番有利であったからにすぎないし、またかりに工業を興したとしても、当時の南部はそれを支えていくだけの市場性に欠けていたのだ。[16] それに南部の経済力の掌握者であったプランター階級の生活態度が一般に濫費的であったということも南部資本の蓄積を阻害した一つの要因であった、[17] と見るのである。なおラッセルは以上のように、南部経済発展の阻害者としての汚名から奴隷制度を護ろうとする立場を更に一歩すすめて、アンティ・ベラム南部における奴隷制度の歴史的役割をそれなりに高く評価しようとする態度を示しているが、そこにはいかにも積極的なレヴィジョニストとしての立場に立つ彼の面目が窺われる。[18]

つぎにグレイは最も包括的な態度で奴隷制論争に参加したレヴィジョニストの一人として注目されるが、その中心的な関心はどちらかといえば企業としての奴隷制度の問題に傾いていた。そして奴隷労働力を利用したプランテイション企業は結局有利でなければならなかった、[19] というのが彼の結論であった。彼が奴隷制企業を有利と見た理由を要約すると、奴隷労働力は自由労働力に比べて一般にコストが安く安定性があり、しかもプランテイション労働力としては作業内容が単純化されていたことや、労働力そのものが強力な管理下におかれていたこととも相俟って、むしろ高能率であったこと、その

上必要があれば女子や子供まで農場に動員することも可能であったこと、[21]それに若し奴隷の市場価値が高騰することにでもなれば――それはアンティ・ベラム期を通じて屢々実際におこったことであるが――奴隷主の利潤は一段と増大したこ[21]となどの諸点が指摘される。かくてグレイは企業としての奴隷制度の不利を主張するフィリップスとその一派の見解を強く反駁したけれども、しかも一方に於ては「奴隷制度が南部の経済的福祉におよぼした究局的な影響は有害なものであった」ことを[22]認めている点が注意される。すなわち彼は奴隷制度のために一般に南部の地方資本の蓄積が遅れたこと、土地や労働力が浪費されたこと、市場の育成が阻まれたことなどを指摘し、[23]南部経済全体からすると奴隷制度の存在は結局南部にとってマイナスであったことを強調しているのである。

之を要するにラッセルとグレイの仕事は、それまでの南部史学界を支配したフィリップスの見解にいわば手ごたえのある最初の打撃を加えたところにその主要な歴史的意義があったといえる。なおここでいま一つ注意しておきたいことはラッセルが専ら経済制度ないしは社会制度としての奴隷制度論に終止したのに対し、グレイはむしろ企業としての奴隷制度論に力を傾注したが、その後につづくレヴィジョニストたちは、その殆んどが後者によって開かれた研究の路線に則っていわゆる奴隷制プランテイション企業の採算性の問題に大きな関心を寄せることとなったということである。

（四）

そこでまず登場するのがT・P・ゴーヴァンとR・W・スミスである。ゴーヴァンはフィリップスとその後継者たちとくにS・ロビンソンやC・S・シドナーが用いた企業の簿記的分析の方法を再吟味することによって、プランテイションの収益性をめぐる論争に参加した。ただしここでは彼のシドナー批判の大要に触れるだけにとどめたい。[24]すなわち、彼はシドナーがプランテイション企業における収支計算に当って当然収入と見なすべき諸項目を、逆に支出として計上している不当を衝き、いわゆるステイプル生産からえられる本筋の収益以外に、例えばプランターが家内奴隷から受けたサーヴ

ィスとか、奴隷の手で栽培された食糧、飼料その他の生産物でプランターによって利用された分はもちろん、手持ちの土地や奴隷の値上りによる収入など、すべて当然利潤として計上されねばならないとした。それどころか、シドナーが経費の中に計上した資本利子も実は彼にとっては実質的な利潤以外の何ものでもなかった。従って記帳方法におけるこれらの欠点を改めれば、奴隷制プランテイション企業は、それまで一般に考えられて来たよりも遙に儲けの多いものとして見直されるべきだ、というのがゴーヴァンの結論であった。[24]

ところでこの簿記をめぐる問題にゴーヴァンとはやや違った視角からとりくんだのがR・W・スミスであった。彼は奴隷の時価でもって資本投資額を再評価することの不当を指摘し、例えば一八五〇年代に奴隷価格がひどく高騰した段階で、その高い時価を基準として、以前から所有していた奴隷やプランテイションで生れた奴隷に対する資本投資額を算出すべきでないとした。だから、若しこの種の算出方式によれば、シドナー一派によって計上された以上に大きな利潤が多くのプランターたちのふところに流れこんでいた筈であるというのが彼の主張であった。[25]

ゴーヴァン、スミスについで登場するのはK・M・スタンプである。彼も亦、プランテイション企業の収益性の問題については少からぬ関心を示しているが、この問題に関する限り彼の主張は概ねグレイ、ゴーヴァン、スミスらの見解をより豊富な史料的根拠に基いて再確認した以上のものではなかったと見られる。[26] 彼の本領はむしろ、アンティ・ベラムの奴隷制度全般に関する問題をもっと広く且つ高い視野から見直すことにあった。その意味においてその論著 "Peculiar Institution" はおそらくフィリップス以後現われた、アンティ・ベラム南部奴隷制度に関する最も包括的な研究として、またアンティ・フィリップス的立場を最も明確に打ち出した代表的著作の一つとして注目される。レヴィジョニストをも含めてこれまでのすべての研究者たちから彼を区別し、特徴づけているものは、「土地所有の大小を問わず、余程見込みのない非能率な奴隷主でない限り、何人もその奴隷所有から必ず利潤をえていた」[27]とする基本的な所見に基いて、一

八六〇年当時においてさえ奴隷制度が衰退に向っていた何等の兆候もなく、従ってまたかりに南北戦争が突然奴隷制度を終焉させることがなかったとしても、奴隷制度が間もなく死滅したと推定しうるようないかなる根拠も存在しなかった、[29]と断じているその主張の中に見出される。

さて、ハーバードの若い二人の経済学者A・H・コンラッドおよびJ・R・マイアーが共同の論文 The Economics of Slavery in the Ante Bellum South を発表してレヴィジョニストたちの論陣に加わったのは一九五八年のことである。彼等の目的は近代経済学の理論と概念に則って、奴隷制プランテイション経営の問題をとりあげその収益性を科学的に測定するにあった。すなわち彼等は、アンティ・ベラム南部プランテイション企業の典型的な仮想例をつくりあげ、ケインズの資本価値の公式に基いて利潤計算を行った。その計算によると、棉花生産の場合の利潤率は生産性の低い土地での二・二%から生産性の高い土地での一三%までさまざまであるが、[30]アンティ・ベラムにおける棉花経営の大部分を総括すると四・五%ないし八%であった。[31]一方奴隷生産即ち奴隷飼育の利潤は、生れた子供の数によって七・一%ないし八・一%であったが、[32]これらの数字からするアンティ・ベラムにおける奴隷主たちは、当然奴隷所有の面だけでなく奴隷生産の面でも相当な収益をあげていた筈であった。つまり奴隷主の利潤は南部のうち、土地条件にめぐまれたところでは棉花生産によって支えられ、そうでないところでは奴隷生産によって約束されていたということで、結局南部全体が奴隷生産によって儲けていた[33]というのが彼等の主張の眼目であった。かくて彼等は企業としての奴隷制プランテイション経営の問題から出発しながら、経済制度としての奴隷制度の功罪論にまで言及し、「奴隷制度は南部の経済的発展を阻害しなかった」として、レヴィジョニストの伝統的な結論にくみする。そして南部に何故経済の多角化や工業化が促進されなかったかという問に対しても、要するに農業生産面への投資が他のどんな産業への投資にもまさって有利であったとするこれまたグレイ以来のレヴィジョニスト的見解を再確認している[34]のである。

ところでコンラッドおよびマイアーのこの論文が今日の奴隷制研究者たちの間にかなりの影響を及ぼしていることは、例えば“Slavery”の著者S・M・エルキンスや“The Farmer's Age”の著者P・W・ゲイツ等の見解の中にもはっきり現われている。すなわち彼等はいずれもコンラッドおよびマイアーの分析に依拠しながら、奴隷制度の経済論について彼等と極めて近い立場を表明しているのである。[35] ただここで特に注意しておきたいのはエルキンスである。というのはもともと彼の本領は単なる奴隷制度の経済論争にあったのではなく、むしろこれまでのプランテイション史料を基礎とするアカデミックな研究方法そのものにあきたらず、アンティ・ベラム奴隷制研究の方法論に一つの新機軸をもち込んだところにあったと考えられるからである。すなわち彼の奴隷制度論の核心は、ラテン・アメリカにおける奴隷制度との比較研究によってアンティ・ベラム南部奴隷制度の一般的特質を解明するにあったのだ。[36] なお彼の場合いわゆる“Sambo”説の分析に独自の社会心理学的方法を適用している点もその見解の当否はしばらくおき甚だ興味深い。[37]

ところが一方コンラッドおよびマイアーの見解に対し、時を移さず反撃を加えたのはコーネル大学のダグラス・F・ダウドであった。彼は奴隷制度の功罪を論ずるのに、奴隷制度が個々の企業として儲かっていたか、さもなければ南部経済の発展にとって障碍であったとする二者択一的問題として考察したコンラッドおよびマイアーの誤りを指摘し、奴隷制度は実は企業として儲けていたにも拘らず南部経済全体の発展にとっては不利であったことを力説するのである。[38] またコンラッドおよびマイアーが奴隷制企業からえられた収益は南部経済の発展のために実際にはあまり利用されなかったとはいえ、少くとも利用される可能性も充分にありえたとしたのに対し、ダウドは南部の工業化がおくれたのはもともと南部自体近代資本主義を成立させるに必要な諸要因が根をおろしうる社会的風土的条件に欠けていたからだとした。[39]

なおさらに新しいところでは、ユージン・D・ジェノヴィーズも奴隷制度の存在がアンティ・ベラム南部における国内市場の形成を阻害した所以を説き、レヴィジョニストに対する批判的立場を打出しているが、[40] ここではその内容に立入る

余裕がない。

（五）

さてジェノヴィーズも指摘しているように、今日ではもはや旧南部の経済的おくれが奴隷制度だけのせいであったと思いこんでいる学者はおそらく一人もあるまい。[18] ただ問題はどこまでが奴隷制度の責任でどこからがそうでないか、そのけじめをどうつけるかである。その点の解明がこれまでの論争では必ずしも充分でなかったように思われる。その点の解明にはやはり南部経済の展開の中で奴隷制度のゆえに起った現象と、それとは無関係にあらわれた結果とを明確に区別しながら、その両面からの綿密なる検討がなされねばならないであろう。例えば奴隷制度が南部経済の多様化を妨げたと主張する論者が奴隷制度の存在しなかった地域で経済が順調にすすんだ事実を明らかにするのはそれはそれでよい。しかしそれとはまた別個に南部経済の多様化を妨げたものが奴隷制度以外のどんな要因でもなかったことを合せて立証するのでなくては画竜点睛を欠くというものであろう。それからいま一つ注意されることは、ダウドがいみじくも指摘したように、たとえ奴隷制度が企業としては儲かっていたとしてもそのことが必ずしも南部経済全体の発展につながったわけでないとすれば、とくにグレイ以後主として企業としての奴隷制度の経済論に関心を傾けた論者たちは、あまりにも永くどちらかといえば第二義的な問題にかかずらいすぎて来たように思われることである。真の問題は単なる利潤の問題でも簿記の問題でもない。それはあくまでも第一義的に南部経済の発展そのものに直結する問題でなくてはならない。その意味では最近エルキンスやジェノヴィーズによって試みられようとしている研究方向は単に奴隷制論争の前進のために新しい問題を投げかけているだけでなく、一般に一九世紀アメリカ経済史における奴隷制度の歴史的役割に関するわれわれの理解を深める上で大きく期待させるものがあるといえよう。

註① たとえば、Avery O. Craven 教授はその著 The Coming of the Civil War, (New York, 1942) において、奴隷制度と南部の後進性との関係の問題をとりあげ、南部経済のおくれはこれまで屢々考えられてきたように奴隷制度のせいではなく、むしろ南部人の理想や価値観のせいで、その意味では「南部は自ら好んで農村的なおくれ (rural backwardness) をえらびとったのだ」(Ibid., pp. 90—91) としているのに対し、Allan Nevins 教授はそれとは全く反対に、南部は決して農村的なおくれを自らえらんだのではなく、南部の経済的おくれは奴隷制度によって押しつけられたものと見ている。(A. Nevins, Ordeal of the Union, 2 vols., (New York, 1947), I, 493—94) 一方優れた南部史家、F. B. Simkins および C. Eaton の両教授は、それぞれの概説書において、奴隷制度が多くの点で南部経済の発展にとって不利であったことを認めながらも、南部経済がおくれたのは奴隷制度のせいだけではなく、南部の自然条件や奴隷主たちの浪費癖、なかんずく南部が本来農業的社会であったことの中に責任の大半が帰せられるべきだ、とした。(Francis Butler Simkins, A History of the South, (New York, 1953), 129—32., Clement Eaton, A History of the Old South, (New York, 1949), 273—78) なお、経済史家については、Louis. Hacker にしても、E. C. Kirkland にしても、あるいはE. L. Bogart にしても、奴隷制度は南部経済のおくれに対して責任をとるべきだと見ている点でほぼ一致した立場をとっているといえよう。(Louis Hacker, The Triumph of American Capitalism, (New York, 1940), 317—21, Edward C. Kirkland, A History of American Economic Life, (New York, 1951), 170—73, Ernst L. Bogart and Donald L. Kemmerer, Economic History of the American People (New York, 1947), 386—410)

② Ulrich B. Phillips, "The Origin and Growth of the Southern Black Belts," *American Historical Review*, XI (July 1906), 803—4. U. B. Phillips, American Negro Slavery, (New Yprk, 1918), 291, 313—14.

③ Ibid., 343.

④ U. B. Phillips, "The Economic Cost of Slaveholding in the Cotton Belt." *Ploitical Science Quarterly*, XX (June 1905), 272. Phillips, American Negro Slavery, 395—99.

⑤ Phillips, "Economic Cost," 271—74. Phillips, American Negro Slavery, 391—92.

⑥ Phillips, "Economic Cost," 275. U. B. Phillips, "The Slave Labor Problem in the Charleston District", *Political Science Quarterly*, XXII (September 1907), pp. 416—39. U. B. Phillips, "The Central Theme of Southern History", *American Historical Review*, XXXIV

(October, 1928), 30—43.

⑦ Phillips, American Negro Slavery, 401.

⑧ James D. Hill, "Some Economic Aspects of Slavery, 1850—1860", *South Atlantic Quarterly*, XXVI (April, 1927), 174.

⑨ Charles W. Ramsdell, "The Limits of Slavery Expansion", *Mississippi Valley Historical Review*, XVI (September, 1929), 151—71.

⑩ Phillips, American Negro Slavery, 338, 401.

⑪ Alfred Holt Stone, "Some Problems of the Southern Economic History", *American Historical Review*, XIII (July, 1908), 784.

⑫ Ibid., 791.

⑬ Robert R. Russel, "General Effects of Slavery upon Southern Economic Progress", *Journal ef Southern History*, IV (Febrary 1938), 54.

⑭ Ibid., 35—36.

⑮ Ibid., 43—44.

⑯ Ibid., 47—48.

⑰ Ibid., 49—50.

⑱ Ibid., 53.

⑲ Lewis Cecil Gray, History of Agriculture in the Southern United States to 1860 (2 vols., Washington and New York, 1933—1941), I, 469—480.

⑳ Ibid., I, 468—71, 548—49.

㉑ Ibid., I, 476—77.

㉒ Ibid., II, 940.

㉓ Ibid., II, 940—41.

㉔ T・P・ゴーヴァンのS・ロビンソン批判については Thomas P. Govan, "Was Plantation Slavery Profitable ?", *Journal of Southern History*, VIII (November, 1942), 514—17.

㉕ Ibid., 519—27. なおゴーヴァンのC・Sシンドナー批判については拙稿「アンテイ・ベラム南部における奴隷制プランテイシヨンの収益性について」「史潮」第八五輯（一九六一）七八—八五参照。

㉖ Robrt W. Smith, "Was Slavery Unprofitable in the Ante Bellum South ?", *Agricultural History*, XX (January, 1946), 62—64.

㉗ Kenneth M. Stampp, The Peculiar Institution : Slavery in the Ante-Bellum South, New, York, 1956), 399—418.

㉘ Ibid., 414.

㉙ Ibid. 417.

㉚ Alfred H. Conrad and John R. Meyer, "The Economics of Slavery in the Ante Bellum South", *The Journal of Political Economy*, Vol. LXVI (April, 1958), 107.

㉛ Ibid., 106.

㊷ Ibid., 109.

㊸ Ibid., 110.

㊹ Ibid., 119—122.

㊺ Stanley M. Elkins, Slavery ; A Problem in American Institutional and Intellectual Life, (New York, 1963), 233—36. Paul W. Gates, The Farmers' Age: Agriculture, 1816—1860. (New York, 1960), 154—55.

㊻ Elkins, Slavery, 63—80, 135—37.

㊼ Ibid., 82—87, 103—15, 131—33.

㊽ Douglas F. Dowd, "The Economics of Slavery in the Ante-Bellum South : A Comment, *The Journal of Political Economy*, LXVI (October, 1958), 441.

㊾ Conrad and Meyer, "Economics of Slavery", 121.

㊿ Dowd, "A Comment", 440—41.

(51) Eugene D. Genovese, The Significance of the Slave Plantation for Southern Economic Development, The Journal of Southern History, Vol. XXVIII (November, 1962), 428—437.

(52) Ibid., 422.

On the Controversy on Slavery in the Ante Bellum South —Since the Rise of the Revisionists—

Tetsuro HATTORI

The historians and economists in the United States have continued arguments on the ante bellum slavery for more than one hundred years. And still they have not reached a consensus on this problem. It might be nonsense to expect that this vexing problem will ever be resolved to everyone's satisfaction. I believe, however, it may give us some suggestions for substantial progress in solving the problem that we trace the development of this lasting dispute through the works of the most able participants in it. That is why I have tried here to have a perspective view of the history of controversy of the ante bellum slavery. By the way I was compelled to limit my view within the sphere of the modern controversy since the rise of the revisionists and to give up making a more detailed explanation of the works of some important disputants.